



学校におけるソーシャル・キャピタルと健康指標に関するマルチレベル分析

科研費
KAKENHI

P-29a05 高倉実(琉球大学医学部), 宮城政也(琉球大学教育学部), 上地勝(茨城大学教育学部), 栗原淳(佐賀大学文化教育学部), 小林稔(京都教育大学教職キャリア高度化センター)

背景:

人々間の社会関係が健康に影響することはよく知られている。ソーシャル・キャピタルは社会関係の資源的側面を表す概念で、人々間の信頼、互酬性の規範(認知的要素)やネットワーク(構造的要素)といった特性を資源として捉えている。公衆衛生学領域では、ソーシャル・キャピタルを集団に属する個人に対して文脈的な影響を与える、いわゆる、集団の力の一つとみなしている。児童生徒の場合、日中のほとんどを過ごす学校は、ソーシャル・キャピタルが醸成される重要な社会的集団の単位となるが、わが国の学校におけるソーシャル・キャピタルの健康に対する文脈的効果を検討した研究はきわめて少ない。

本研究は、マルチレベル分析を用いて、高校生の主観的健康と学校レベルの認知的・構造的ソーシャル・キャピタルとの関連を個人レベルの要因を調整して検討することを目的とした。

方法:

沖縄県全域から確率比例抽出により県立高等学校30校を抽出し各学年1学級に在籍する生徒3,386名を標本として、2012年10~12月に無記名質問紙調査を行った。

学校におけるソーシャル・キャピタルはTakakura et al (2014)の尺度を適用して個人レベルの認知的ソーシャル・キャピタル(生徒への信頼・互酬性と先生への信頼)および構造的ソーシャル・キャピタル(組織活動参加)を測定した。学校レベルのソーシャル・キャピタルは学校ごとに個人レベルのソーシャル・キャピタルを平均した得点を用いた。健康指標は主観的健康(1~4点)を用い、「健康 [1]」と「健康でない [0]」の2群に分けた。調整変数として、学年、性、学校種、地区、家族構成、親の学歴を用いた。

分析は、学校をランダム効果としたマルチレベルロジスティック回帰モデルを適用し、各ソーシャル・キャピタルのみを投入した粗モデルとすべてのソーシャル・キャピタルおよび調整変数を同時投入した多変量モデルを検討した。

なお、本研究は琉球大学疫学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

結果:

対象の約90%が自分を健康だと回答していた。また、普通科、地方部、両親と同居、高い親の学歴の生徒ほど健康の割合が多かった。

マルチレベル分析の結果、個人レベル要因を調整した後も、学校レベルの認知的ソーシャル・キャピタルは主観的健康と正の関連を示した。一方、構造的ソーシャル・キャピタルはいずれのレベルにおいても主観的健康とは関連を示さなかった。

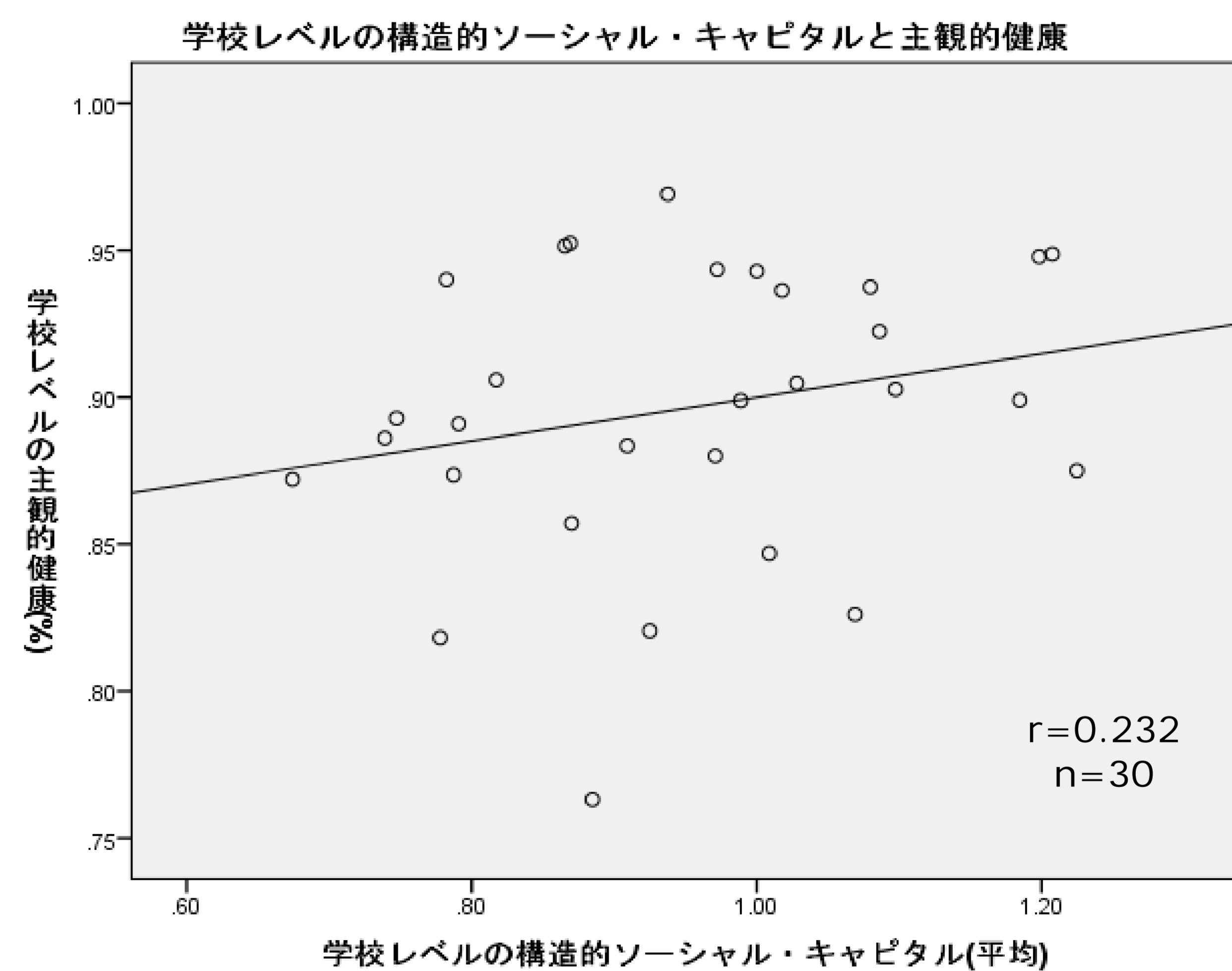
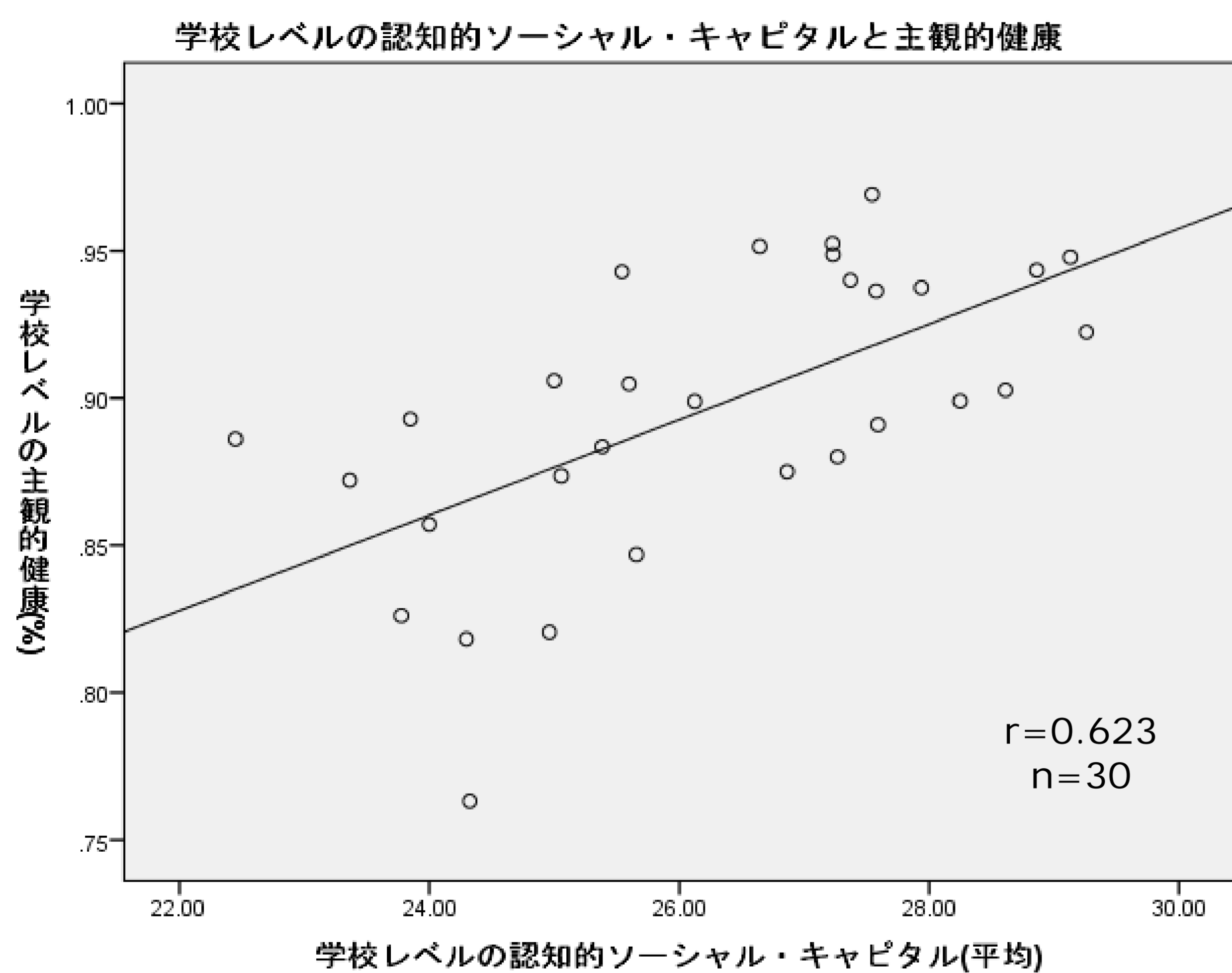
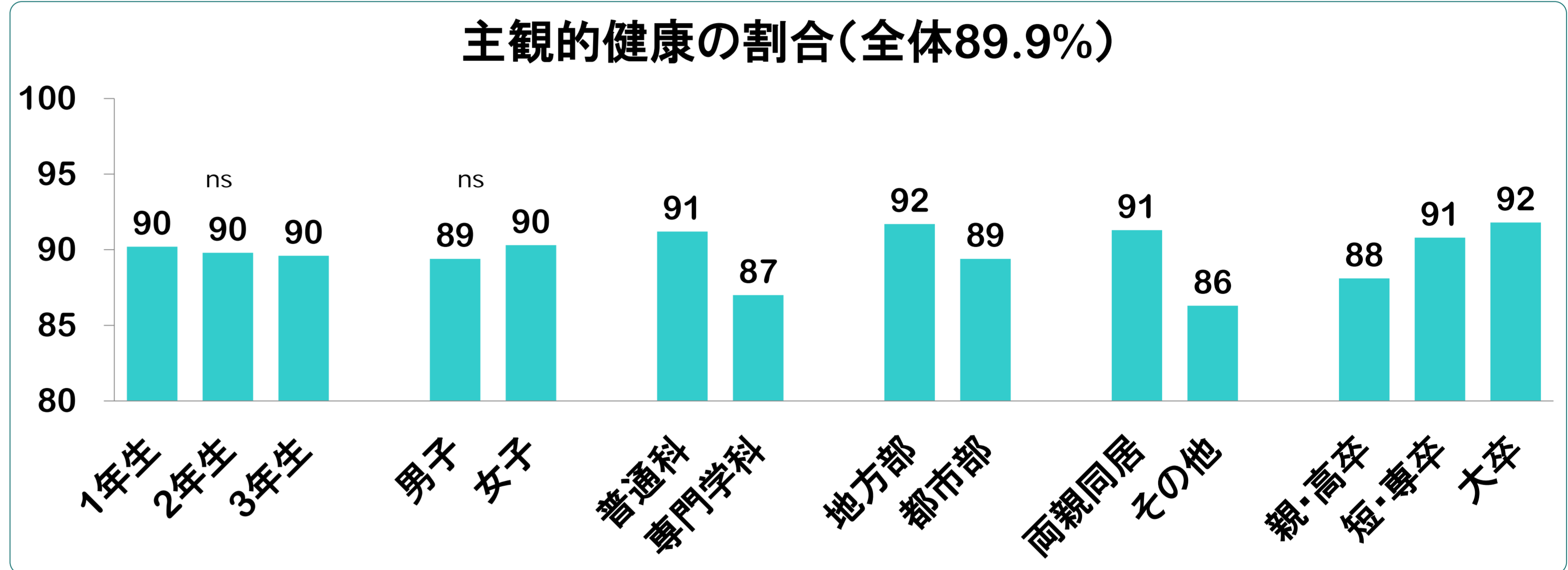


表. 個人・学校レベルのソーシャル・キャピタルと主観的健康との関連(マルチレベルモデル)

	OR (95%CI)	AOR (95%CI)
個人レベル		
認知的ソーシャル・キャピタル	1.8 (1.6 -2.0)	1.7 (1.5 -1.9)
構造的ソーシャル・キャピタル	1.0 (0.9 -1.1)	0.9 (0.8 -1.1)
学校レベル		
認知的ソーシャル・キャピタル	1.4 (1.2 -1.6)	1.5 (1.1 -1.9)
構造的ソーシャル・キャピタル	1.1 (0.9 -1.3)	0.8 (0.7 -1.0)

OR: 粗オッズ比

AOR: 学年、性、学校種、地区、家族構成、親の学歴、全ソーシャル・キャピタルを調整したオッズ比。個人レベルソーシャル・キャピタルは学校平均でセンタリングした得点を用いた。

各ソーシャル・キャピタルの効果は平均から1SD増加した場合のオッズ比を示している。

結論として、高校生の健康に対して学校における認知的ソーシャル・キャピタルの文脈効果が認められ、学校集団の力が生徒の健康に関連していることが示唆された。高校生の主観的健康の改善にとって学校の認知的ソーシャル・キャピタルは重要な役割を果たすと思われる。

文献

Takakura M, Hamabata Y, Ueji M, Kurihara A. Measurement of social capital at school and neighborhood among young people. *School Health* 2014; 10: 1-8.

(本研究は、JSPS科研費23300246の助成を受けた)